
宮地正人さんを送る

吉岡眞之

宮地正人さんは2001年9月に国立歴史民俗博物館の館長に着任され、2005年8月末に任期満了を迎えるまで、歴博の運営に多大の力を注がれた。

このころは歴博が大学共同利用機関法人としてスタートしようとする時期に当たっており、その準備のための課題が山積していた。相次いで示される文部科学省のプラン、日々変化する方向性。着任早々からこれらの課題に対応するために宮地さんは奔走され、その御苦労は想像を絶するものがあったと思う。このような中で、その時期、歴博の将来にとって大きな問題が提起された。一つは文化庁系博物館への移行の問題であった。宮地さんは博物館機能を持つ大学共同利用機関としての歴博の特質について理解を求めするために文科省と幾度も折衝され、他方、館内においてもこの問題を全館職員に諮り、共同利用機関としての道を従来どおり歩むことで館内意見を取りまとめ、これをもって文科省を説得された。この選択は歴博の研究機関としての側面を前面に押し出す必要を意味するものでもあり、宮地さんはこれに沿った館内の改革を進められた。基本資料を収集・整理・公開するとともに、それにもとづく共同研究を推進して日本の歴史と文化の先端的研究を行い、その研究成果を広く学界および社会に提供するための展示を実施することを柱とし、これらを全体的に進めるために研究連携センター・歴史資料センターを設置されたのはその一環であった。

もう一つ重い課題として文科省から提起されたのは国文学研究資料館との統合問題であった。これには国立史料館の問題が絡んでおり、史料館の取り扱いについて歴史学界からの要請も相次ぎ、複雑な様相を呈していた。これについても宮地さんは精力的に取り組まれた。松野陽一・国文学研究資料館館長（当時）との会談を重ねる一方、歴博と国立史料館との意見調整も行ったが、この問題は、小平桂一・総合研究大学院大学学長を座長とし、歴史学・国文学の学界代表として藤本強・井上宗雄両氏が加わって設置された第三者によるパネルに検討を委ねることになり、宮地さんはその場に参加して歴博の考え方を積極的に開陳された。この問題は両館の独自性を尊重するという方向でパネルの見解がまとめられたこともあり、ひとまず収束した。

法人化にともなう館内外の課題はこれだけにとどまらない。大小さまざまな制度の改変や多くの改革が求められ、宮地さんは館長としてそれと格闘された。東京大学史料編纂所の所長として組織の運営に当たられた経験をお持ちではあったが、共同利用機関の特殊性、また歴史・考古・民俗の各研究分野の特性を前提とする協業の実現という歴博固有の課題は、史料編纂所とは大いに事情を異にしていると思われ、戸惑われたことであろうし、これに法人化にかかわる問題が加わって、おそらくその御苦心は倍加したであろう。このような中で宮地さんが一時期体調を崩されたことにつ

いては、私も歴博の一員として責任を強く感じ、大変申し訳なく思っている。

宮地さんの任期中は、このように法人化問題への対応に終始したといっても過言ではないが、実務に追いまわられる中でも、わずかな時間を見つけては研究に取り組んでいられた。ただしそれは宮地さんの関心の赴くままに行われていたのではなく、研究機関としての歴博のあり方を見据え、それに沿って実践しなければならない課題として自らの研究も位置づけるというお考えによるものであったと思われる。2002年にスタートした共同研究「佐倉連隊と地域民衆」は総合展示の再構築の一環として第6展示室（現代展示）の新規開設を視野に入れたものであったし、2003年に立ち上げた共同研究「平田国学の再検討―篤胤・鏡胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究―」は、資料収集・共同研究・研究展示という歴博のコンセプトにまったく即したもので、翌年には特別企画「明治維新と平田国学」の展示として結実し、これによって研究成果を内外に示された。さらにこの研究は、平田家史料の翻刻と解題を公表することにより、未公開史料の早期公開を実現した（『国立歴史民俗博物館研究報告』第122集、2005年3月）という点でも特筆されるものであったと思う。

宮地さんは日本近代史を専攻され、当初は『日露戦後政治史研究』（1973年）に集約されているような明治期の政治史を中心に多くの研究成果を発表され、学界の注目を引いた。その後、次第に幕末・維新时期に研究の対象を移し、『幕末維新風雲通信』（1978年）、『幕末維新时期の文化と情報』（1994年）、『幕末維新时期の社会的政治史研究』（1999年）、『幕末京都の政局と朝廷』（2002年）、『歴史のなかの新撰組』（2004年）などを相次いで上梓されている。「平田国学」の研究もこの流れの上にあることはいうまでもない。「生来の史料好き」ということもあるであろうが、一貫して未公開の史料を学界に提供するということを使命とされており、上記の著書や研究はいずれも何らかの形で新史料の紹介をともなっている。このような史料に対する宮地さんの姿勢は、史料編纂所における史料編纂の長い経験の中で培われた信念の現われなのであろう。

現在、宮地さんは「佐倉連隊」の展示の実現と平田家史料の翻刻を完成すべく、歴博に通っているが、昨年10月に行われた名誉教授称号授与式後の会食の席では「書きたいことが山ほどある」ともおっしゃっていた。そのお姿や表情からは、研究に専念できる環境に身を置いている安堵感と同時に、研究に対する厳しく張り詰めた強い意思が感じられる。宮地さんにはやはりこれが一番似合うのであろう。

（国立歴史民俗博物館研究部）